

4. 淡水真珠対策研究費

1) 琵琶湖と西の湖におけるイケチョウガイの成育現況

西森克浩・上野世司

【目的】

現在、真珠養殖業はイケチョウガイの改良種を用いて営まれているが、改良種は在来種と比べて殻幅が薄いため、大きな真珠を生産しにくいことや、真珠の質が在来種と比べてやや劣るという問題点を持っている。このため、在来種を真珠母貝として利用することが望ましいが、昨年度、在来種の主な生息場である琵琶湖南湖の草津川以南（図1）で調査したところ、現存量は5,129個体と非常に少なかった。また、生息密度も36m四方に1個体と非常に低いことから（生息場に均一に分布しているとした場合）、受精率の低下等が懸念された。これらのことから、在来種を保護し、現存量を増大させる必要があるため、今回の調査では、南湖生息場での成長量の把握と南湖生息場での成長量がよくない場合に在来種の養成場所のひとつとして期待される西の湖での成長量の調査を行った。

【方法】

産卵期前に琵琶湖南湖の生息場で採捕したイケチョウガイ538個体に、個体識別可能な標識を付して、平成10年4月に南湖生息場内の岸よりの2ヶ所（図1、St.1、St.2）に局所的に放流した。放流したイケチョウガイは平成10年11月から再捕して成長を調べた。

西の湖（図2、St.3）での成長量は、個体識別可能な標識を付したイケチョウガイ（琵琶湖南湖で採捕）10個体をパールネットに収容し、水面から1m、底から0.5mの位置に垂下して調査した。調査は平成10年4月から11月にかけて行った。

【結果】

局所放流地点で、平成11年3月にセタシジミ用の貝桁網を用いて採捕を行ったが、当歳貝は採捕されなかった。

琵琶湖南湖の生息場での採捕数は546個体であり（図3）、その内標識個体は12個体であった。年間平均成長量は4.2mm、最大成長量は10.1mm、最小成長量は0mmであった（図4）。成長量はバラツキが大きく、全く成長していない個体もあった。

西の湖での年間平均成長量は6.4mm、最大成長量は10.9mm、最小成長量は3.0mmであった（図5）。供試貝10個体のうち2個体が死亡した。

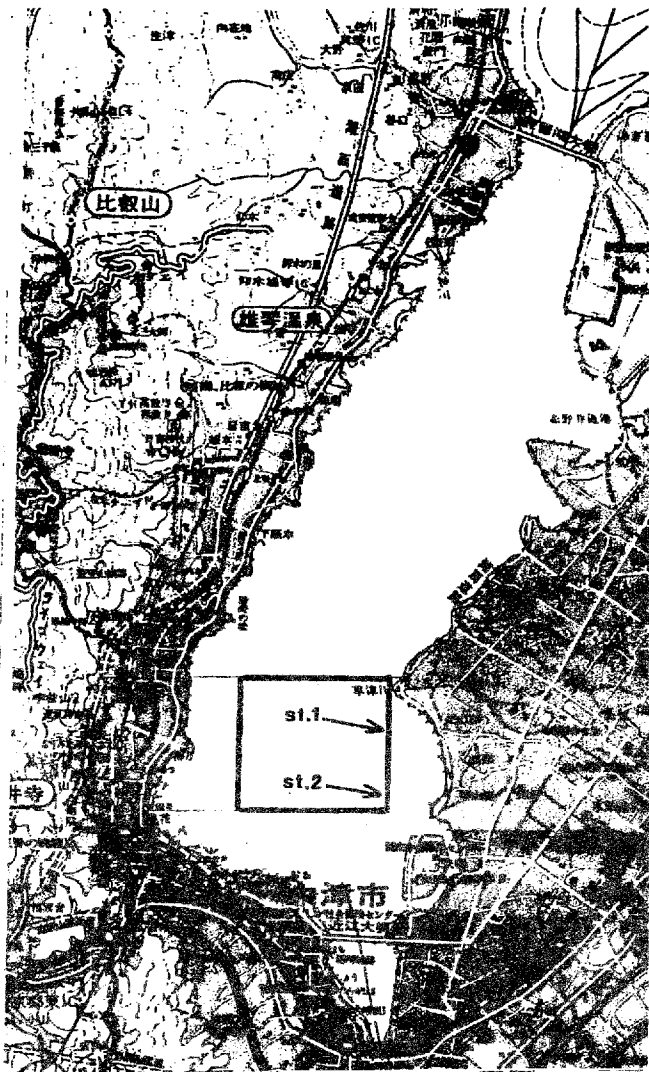


図1 琵琶湖南湖の調査地点

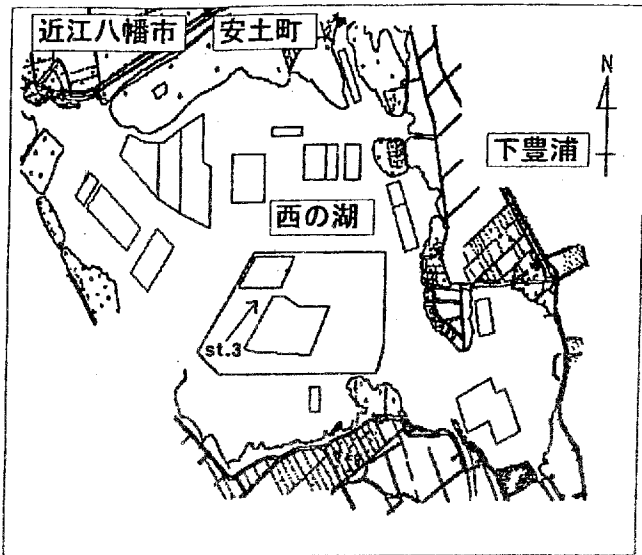


図2 西の湖の調査地点

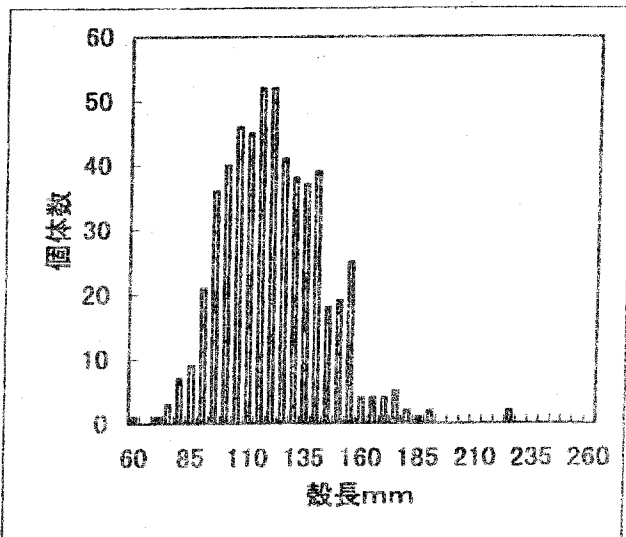


図3 琵琶湖南湖で採捕されたイケチョウガイの殻長組成

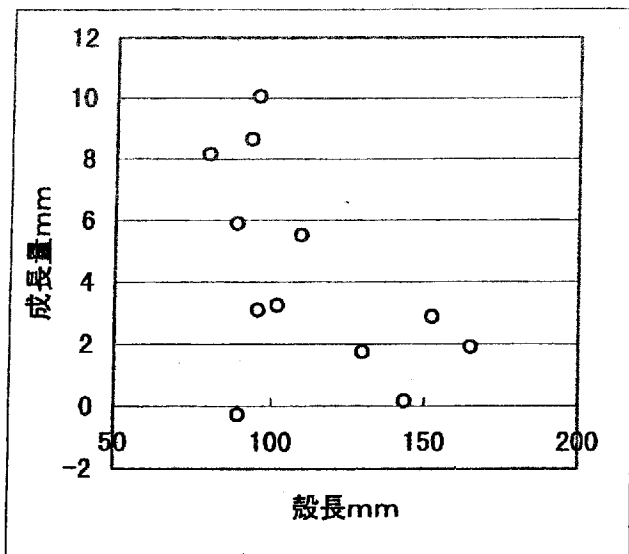


図4 琵琶湖南湖生息場での成長量

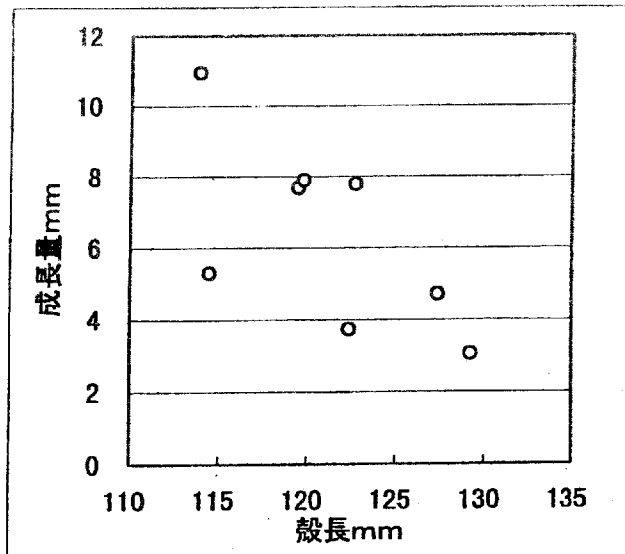


図5 西の湖での成長量